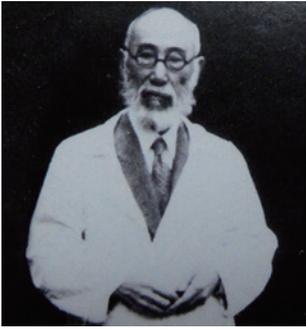


三上家八代目

三上剛太郎医師の生涯



仁愛の医師誕生

1869年(明治2年)11月15日、剛太郎は、代々医家である三上家の8代目として誕生しました。1884年(明治17年)、父「子恵」に伴われて上京。三田英学校(現錦城学園高校)に入学し、医師への第一歩を踏み出しました。ところが、在学中に文学者森田思軒の影響を受け次第に文学へ傾注し、読売新聞社社会部記者になりました。1893年(明治26年)、父が亡くなり再び医師への道を歩みました。翌年1月、済生学会(日本医科大学)に入学し、医術開業免許状を取得し、同年佐井村に帰村して三上医院を引き継ぎました。日露戦争終結後再び佐井村で開業し、幾度も上京を繰り返し、国立伝染病研究所(現東京大学医科学研究所)で医療技術の習得に努めながら地域医療に尽力しました。

生命を救った手縫いの赤十字旗

1905年(明治38年)1月、日露戦争の時、剛太郎は満州(今の中国北東部)へ軍医として従軍しました。ロシア軍に包囲され、今まさに攻撃を受けようとしていた仮包帯所に「手縫いの赤十字旗」を掲げて、多くの負傷者の命を救いました。この赤十字旗は三角巾2枚で四角にし、赤毛布を切り裂き、十字をつくり縫い合わせたものです。1963年(昭和38年)、スイスのジュネーブで開催された赤十字100周年記念博覧会で「手縫いの赤十字旗」が展示され世界の人々に深い感動を与えました。戦場で作られた赤十字旗は、人類のヒューマニズムを基にしてつくられた「ジュネーブ条約」の生きた証として残されています。



死ぬまで勉強

医学・政治学・哲学・宗教・歴史・文化など、あらゆる分野の書物を読破した剛太郎。80歳を過ぎてからは少年時代の夢であった「レ・ミゼラブル」を原語で読むため、辞書を片手に独学でフランス語をマスターしました。「死ぬまで勉強」は剛太郎の口癖でした。

生誕百五十年祭に向けて 4年間にわたり プレイベントを開催

三上剛太郎が生まれて、ちょうど百五十年の節目となる2019年11月に向けて、4年間にわたりプレイベントを企画してきました。「赤十字の里づくり推進大会 ～三上剛太郎生誕百五十年祭プレイベント～」と称し、専門家による講演や、吹奏楽演奏、標語コンクールの表彰、学生による研究発表等を行い、多くの方々に、三上剛太郎生誕百五十年への機運を醸成することができました。



特別展 三上剛太郎展

生誕百五十年祭当日は、津軽海峡文化館アルサス2階ロビーにて「三上剛太郎展」を併せて開催しております。仁愛の医師 三上剛太郎の生涯とその功績、貴重な遺品などをご覧ください。